

第19回「たばこはやめよう！」(2006~07年)コンクールの審査講評

1. ポスターの部

学校、役所、駅のホーム、乗物、会議、銀行など、禁煙・無煙が増え、社会的改善が進んでいます。ポスターコンクールには、1,877点の作品が寄せられました。審査は、高校生~一般、中学生、小学生低学年・高学年、幼児に分けて行い、「たばこはやめよう!、吸やないで!...子どものために、みんなと自分のために」をテーマに、美術コンクールとは違った観点から、審査員9人で投票方式+協議で三次~最終審査まで行いました。

ポスターには、言葉によるコミュニケーションとは異なる特色があります。ポスターは、伝えたいことを絵や色・文字などによって、自由な発想で、美しく印象に残るような表現をし、効果的に発信します。家族や身近な人へのメッセージを、作者が自分の感覚や心情と共鳴させながら技法などをよく工夫し、楽しく、ほほえましく、作者の心からのメッセージが私たちの心に響いてくるような作品が多くありました。

発想の転換や気の利いたアイデアで表現された作品は私たちを楽しくさせてくれましたが、自分の力で表現されていて、分かりやすく、印象強くメッセージを表現している作品や、優しさのある目や顔の表情が豊かな作品の評価が高く、今年は、全年齢層の入選ポスターの中から、啓発ポスターやカレンダーのデザインに活用する観点から、ほのぼのした表現の作品を厚生労働大臣賞(幼児)、受動喫煙のアピール表現の優れた作品を文部科学大臣賞(中学生)として各1点を選定しました。

これら入賞した作品が、次回の啓発ポスターやカレンダーなどのデザインに活用され、多くの人の目に触れ、社会的改善に役立てられることを楽しみにしています。(新谷隆夫、瓜生隆子)

2. マークの部

猛スピードで走行中にも認識されねばならない交通標識に代表されるように、文字による説明は無くても意味が理解されねばならないのがマークです。それは“ひと目で分かる”シンボルという性質が求められるためです。今回の応募総数408点のほとんどの作品に、禁煙や嫌煙を意味する文字が並んでいました。毎年のことながら、マークの存在意義が十分に浸透しているとは言い難いようです。言葉で説明することなく、パッと見て分かる作品をまずは望みたいものです。

選考は、他の部門と同様に予備選定された作品34点を、一次、二次とふるいにかけて行いました。グラフィックデザインの分野で、パソコンによる制作が当たり前になっていることを反映して、34点の中に手描き作品は少数で、コンピュータグラフィックの特質が現れた綺麗な色彩と、すっきりしたフォルムの作品が多数を占めていました。パソコンでの制作によってスマートな出来映えの作品が全盛になると、逆に、素朴で力強いタッチの手描きに郷愁を覚えたりもするものです。

審査員全員に好感を持って迎えられたのが、禁煙した父親とその背後から笑顔を覗かせる幼児をほのぼのタッチで描き「ありがとう」の文字を添えた作品で、厚生労働大臣賞に選ばれました。文部科学大臣賞は、顔とタバコを組み合わせてNOをデザイン化した作品でした。この二つの作品は、共にマークに相応しいもので、色づかいも上品な印象を与えています。(山田 彬)

3. 標語・川柳・ネーミングの部

喫煙は本人だけでなく、周囲の人の健康にも良くない迷惑な行為であることは、今や自明です。それだけに、あまりにストレートな言い回しよりも、いわゆる捻(ひね)りの効いた表現が訴えかける力として大きいものがあります。そこで問題は捻り具合です。しかも“シンプルで、明るいイメージ”となると、結構難しくなってきます。キーワード、比喻、語呂の良さ、言葉遊び等の要素も勘案しなければなりません。

今回の応募総数は11,532点で、その中から予備選定された作品86点について審査員が一次、二次とふるいにかけて行きました。例年のことながら、幼い子どもを持つ家族への愛や、若いカップル間でのプロポーズを題材にした作品が目立ちました。

文部科学大臣賞に選ばれた作品「奏でよう きれいな息で 禁煙メロディー」は、素直な捻りが光る美しい標語です。“奏でよう”や“息”という言葉に作者の意図が表われ、思わず口ずさみたくなる文字通りメロディー感覚に溢れたものです。厚生労働大臣賞の作品「喫煙を しないパパママ 持つ誇り」は、子どもの立場から親を称賛する点に新鮮さがあります。

入選には漏れたものの、これまで以上に優れた作品が多かったのも今回の特徴です。4文字熟語に仕上げた作品「街頭煙絶」などは批評性もあり、これをポスターに添えて使用すれば、面白いものが出来上がるだろうと想像できる一例でした。(山田 彬)